

2008年
新春号

1月1日発行 ■ 通巻8号

市民一人ひとりの生涯学習を支援する情報誌

季刊 ゆとろぎ

発行：羽村市教育委員会 / 企画・編集：羽村市生涯学習センターゆとろぎ+ゆとろぎ協働事業運営市民の会

賀正

明けまして
おめでとーございませす

ウィーン・フィルの流れをくむ新進ピアニスト来日！

08年10月
ゆとろぎ公演

ウィーン フーゴ・ヴォルフ 三重奏団 (p.6)

アカデミア

ゆとろぎ文化講演会を前に

日本語学者の金田一秀穂先生

を訪ねた (p.5)

陶芸展

陶の世界 (p.4) 臼井一紀

連載
私の生涯学習
第4回

少女マンガのヒロインに憧れた少女が演劇と出会い、
その“隠れた力”を借りて、新たな挑戦を始める

塩田真紀子さん (p.3)

- 新春鼎談 羽村市文化協会・ゆとろぎ市民の会・生涯学習センターゆとろぎ
- 08年度協働事業企画案の概要まとまる

撮影 / Gyula Fodor

謹賀新年

新春鼎談

羽村市文化協会会長 今井大宰氏(写真・中)
ゆとろぎ協働市民の会会長 関沢和代氏(同・左)
ゆとろぎセンター長 田中繁生氏(同・右)
司会 平田栄一氏(ゆとろぎ市民の会)



3年を振り返って

司会 ゆとろぎは今年開館3年目を迎え、文化協会は4年目を迎えました。

今井 石の上にも3年と言いますが、文化協会の設立を呼びかけた時、厳しいご意見もありましたが、現在でも加盟団体が増えています。今後は協会の主催事業を着実にやっていくことと後援、主管、協力の事業を柱に推し進めていきたいと考えています。

田中 ゆとろぎとの協働事業のサロン・コンサートがとても盛況ですね。

今井 2か月に1回のペースで開催しています。お蔭さまで定着しましたね。毎回、ロビーに一〇〇人以上のお客さんがみえています。邦楽あり、クラシックあり、軽音楽あり、バラエティ豊かな展開を考えていきたいですね。

関沢 市民のニーズをどうキヤッチできるかが重要ですね。ただ座って会議をしているだけではダメですね。

今井 おっしゃるとおり。いろんな要求を的確に捉えて提供する。むずかしいけれど大切なことです。自分よがりな企画をしてはいけません。

関沢 それを市民にどうお知らせしていくのかも課題の一つです。ホームページ、印刷媒体、口コミといろんな方法がありますが、どの形がベストなのか、いま模索しているところですね。

今井 どんなにいい企画をたてても市民に伝わらなければ意味がない。スポーツ関係、ボランティア関係の情報も含

めて、市全体の情報を一カ所で見られる、そんな窓口がほしいですね。

田中 文化協会と市民の会のコラボレーションが進んでいますね。文化協会の理事の方が芸術鑑賞部会や学習文化部会の一員として参加されて、例えば藤原道山さんの企画や講座の企画を進めている。「第9市民演奏会」もそうですよね。

今井 それをもう一歩進めた協働を図りたいですね。

関沢 市民のためにいいものを提供していきたいとみんな思っています。目的は同じなのですが、立場が違えば考え方の違いが出てくる。それをどのように集約して行くか、むずかしいところですね。

今井 得手不得手がある。いろんなスタッフがいる、いろんな知恵を出し合っていて、いろいろな恵みを出し合っていていかなないと、自分好み、ひとりよがりなものになりがちです。そこにいちばん気をつけなくてはいいですね。

田中 市民の会の企画は3段階で叩かれ採まれています。まず、各部会内で提案を採り、それが役員会でさらに採まれて、出直しになったり却下されたり。最終的に教育委員会と市民の会との協議会で検討・承認という流れになっています。相当に厳しいですよ。

これからの課題は?

司会 近隣にも市民ホールがあつて、同じような事業を行つています。羽村らしさ、

ゆとろぎだからこそ、という部分が必要なのでは?

関沢 そこがむずかしいところですよ。やりたいことと「やれること」は別で、そこらへんの議論を尽くして、自分たちの進んでいく道を考えなければいけないと思います。やみくもに「これをやろう」ではなく、一度立ち止まって進路を考えることは大切ではないかと思ひます。

司会 3年目を迎え、記念事業の企画が上がつていますね。

関沢 文化協会との協働事業「第9市民演奏会」はこの5月から合唱の練習が本格的にスタートします。09年春には、一般市民も交えて「生涯学習フォーラム」を企画しています。3周年を機に、一度、自分たちの進んできた道を評価、検証、いろんな意味で振り返つてみよう。そこから、また新たに進もうと準備を進めています。

今井 自分を振り返り、今までのことを踏まえて改善することが大切ですね。文化協会は参加してくれた方々に、どうすることが提供できるのか、どうアドバイスできるのかを考えていきたいと思ひています。

田中 ゆとろぎは生涯学習の拠点であり、まちづくりの発信基地でもあります。市民の会と文化協会の協働で、また新しい、違うものが出てくるでしょう。それをまちづくりを生かすのがゆとろぎの特色だと思ひま

す。市民ニーズをどれだけ吸い上げて事業化していくか、羽村らしさをどう出していくか、これからの課題ですね。

これからの目標は?

関沢 「ゆとろぎをあなたはどう使うの?どう楽しむの?」と市民に問いかけたんです。市民の会のコンセプトは「来て、観て、楽しんで」そして、「参加して」です。「絵を習いたい、コンサートを聴きたい」だけでなく、自分が送り手、市民の会のスタッフとして自分の力をゆとろぎで発揮してほしいですね。

事業や講座に参加することから一歩中に入つて、自分のもつている力を活かす方法はないかと考えてもらえたら、ゆとろぎがまた違う面で生きてくるのではないかと思ひます。

司会 「参加する」ことによつて、個人個人が豊かな人間関係や時間をもつことができる。それがまちづくりの基礎にもなる。

関沢 その人にとっての生涯学習にもなるんですよ。今井 人間関係につながるものがいいですね。そんなまちづくりの核のようなものがいっぱいできてくるのが大事。それがゆとろぎだと思ひます。

司会 イベントを観るのも参加だし、プロデュースする側にもなるのも参加。自分が主体的に、アクティブに関わるということですね。

今井 プランをたてるのが得意な人もいれば、出演するのが好きな人もいます。その人にとつて参加しやすいところで活躍してもらうことがいちばんですよ。ただ観て、楽しただけでは、見過ごしてしまふ部分が多いですから。是非、参加してほしいですね。司会 阿波踊りの精神ですね。踊りの輪の中には違ったおもしろさがある。

関沢 そう、そう。でね、「参加」の一歩はアンケートだと思ひますよ。「観て、感じたこと」をアンケート用紙に書き表すと、「ここが面白かった、面白くなかった、こんなことをしてみたい」というのが出てくる。参加の一歩として自分の意見を形にしてほしいですね。

司会 「参加する喜び」をゆとろぎの共通理念にしたいですね。

関沢 「ゆとろぎで、あなたがいきいきしてみてください」ですね。(一)



042(570)0707

07年春から始まった連載『私の生涯学習』はさまざまな分野でさまざまな生涯学習を実践している方々を紹介しています。今回は、自ら劇団を起し演劇を通じて地域活動に目覚め、二児の母親として子育てのかたわら羽村市図書館で読み聞かせのボランティア活動にも取り組みながら、この3月からゆとろぎで講座を受け持つ塩田真紀子さんです。

少女マンガのヒロインに憧れた少女が演劇と出会い、その“隠れた力”を借りて、新たな挑戦を始める

し お た ま き こ
塩田真紀子さん



平成元年、「子どもたちに身近な場所で演劇の公演をし、創造活動を通じて創造力、感性の豊かな明るい人間関係をはぐくむ」ことを目的に、『劇団アリス』を結成。7年、羽村第二中学校演劇部講師。14年、『おはなしたまご』メンバーとして羽村市内の学童クラブ等でおはなし会開催。同年、生涯学習1級インストラクター資格取得。15年、羽村市図書館ボランティアサークル『おはなしほけつ』結成。同年、『劇好チャンネル』旗揚げ。18年、ゆとろぎ開館イベント「市民ミュージカル」企画・演出。19年、カウンセラー資格取得。14年から羽村市社会教育委員。

演劇との出会い

塩田真紀子さんは演劇と出会ったことで人との出会いのすばらしさに魅了された。20代で自ら劇団を立ち上げ、演劇公演や動物園での着ぐるみショーに出演したり、コミュニケーション・フェスティバルのスタッフや中学校の演劇部の指導にも関わってきた。

平成11年、当時の公民館との協働事業「青少年のためのミュージカル講座」で企画・演出を担当していたときのこと、参加した大学生のひとりからこんなことを言われた。

「大人の人が、自分たちのために一生懸命やってくれるのは初めての経験。こういう場に入ることができてよかった」

塩田さんは、中学生の頃の

自分を思い出した。他人からは「ワルでもなく優等生でもなく、格別目立ちもしない、おとなしい子」に見られていた自分の中に「ほんとの私は違う。もっとこういうふうになりたい」という思いがふつふつと沸き上がっていた。だが、だれにどう相談すればいいのかわからなかった。そういう子どもたちに「大丈夫だよ。思いっきりやってみよう」と言ってもらえる大人でありたいと思った。

塩田さんは映画や芸能が大好きな家庭に育った。小学生の頃の夢は演劇家だった。芸人よりも演劇家をめざすあたりが、塩田さんらしいところなのかもしれない。母にコントの台本を書いてもらい、級友と演じてウケたときの楽しさがその基本にあると言う。

夢が力を生んだ

他人も巻き込んだコミュニケーション、のびのびと表現し合える「場」を作ることが、生涯のテーマだと言う。

「やりたいこと」がまずあって、そのために学ぶのが塩田流である。高校生の頃、「母の手作りのお菓子とパンの店をやったら人を癒すすごい空間ができるかも、お店をやるなら栄養士の資格を取ろう」と専門学校へ。結婚後、勤労福祉会館の一角に『ほけつと亭』というお店で夢を実現した。

演劇活動も、まずはアマチュアの劇団に所属したものの、「もっと力をつけたい、声優もいいかも」と演劇研究所や声優の養成所に通い、ついには新聞や雑誌で仲間を募

って劇団を結成。その後、絵本の読み聞かせやおはなし会へと活動の幅を拡げて行った。

その間、双子の子どもの誕生で劇団活動を育児休業。通信教育でカウンセリングを勉強する。塩田さんにとって、演劇と心理学（癒し）は別々の興味対象で、「自分にとっての二本柱」と思ってきたが、前述の大学生の言葉などに触発されて、「演劇と癒しの合わせわざのワークショップみたいな講座ができないだろうか」と思うようになり、生涯学習1級インストラクターやカウンセラーの資格も取得した。そのときどきの「やりたいこと」のために必要なことを学ぶうち、自分にできることの引き出しが増え、いつの間にかばらばらにみえた興味

が纏り合わさって方向性が見えてきたと言う。

「サニークラス」の誕生

塩田さんが今かかわっている活動のひとつに『サニークラスクラブ』がある。ゆとろぎ主催の「小さい子どもを持つお母さんのための講座」から誕生した子育てサークルである。講師にカウンセリングの専門家をお願いした講座というところで興味を持った塩田さんは「うちの子はもう小学校の高学年なんですけど、自分の勉強のために混ぜてもらっていいですか？」と申し込んでみたところ、参加者は「子どものことを一生懸命考えて

いるし、自分も一生懸命に楽しみたいって、ものすごく前向きな人たち」だった。講座終了間際、このまま解散するのは惜しい。「私は自分の子どもも大きいから、みんながこのまま集まりを続けたいと思うなら、手伝えると思うけど」ともちかけてサークルに発展した。

「メンバーがしゃべって元気になればいい」と『サニークラス（陽気でおしゃべりなガチョウ）』と名づけた。月2回、親子で一緒に遊んだり、お母さんたちの心の中の「今どう？」を吐き出す場として活動している。12月には「お楽しみ会をしようよ」とパネルシアター作りに挑戦した。

子育てサークルはそこそこにあるが、ちょっとしたもめごとや感覚の違いに「嫌だな、違う」と感じて、互いに言えずに人間関係に疲れてしまふことも多い。サニークラスでは、「そういうの、ちゃんと言おうね。子ども同士がけんかになってもしばらく見ていようよ。ぶつたらぶち返すのか、泣いたらゴメンネってなるのか、見守ってみよう」が約束になっている。「こんな提案も仲間の中から出てくるところがいいでしょう」と笑う。

新たなチャレンジ

この春には、さらに対象を広げたコミュニケーションの講座『劇的セルフプロデュース講座』「自分を変えたい！」

と思っている人へ」を企画している。自己表現、コミュニケーションが苦手な人に、演劇の手法を取り入れたロールプレイで、「何か変われるきっかけを作れば」というのが狙いである。「例えば、電車で席を譲りたい気持ちはあるけど、どうしたらいいのかわからなくてできない。結局寝たふりをしてごまかしちゃう、とかあるでしょう。そんなとき、どうしたらいいんだらうね？ やってみようか。ここでなら、いろいろ試すことができるよね。あ、それ、いいんじゃない。今度ほんとの場面でやってみよう。みたいなことをやるつもりだよ」

「人間関係が不器用でいつも緊張してしまう人、ほんとは他人と打ち解けたいのに怖いと思ってしまう人、駅前ニヤンコだけが友達みたいな人、別にコミュニケーションが器用にならなきゃいけないわけじゃないけれど、ただ、自分の思いをうまく伝えられるようになるだけで、ラクになると思うんですよ。少しだけそのお手伝いができたらいい」と抱負を語ってくれた。

(取材/江久保千英)

『劇的セルフプロデュース』講座
日時 3月8・15・22・29日
午前10時～12時(全土曜日)

会場 ゆとろぎ音楽練習室2

対象 中学生～30代の男女

受講料 一人2000円

※問い合わせ・申し込みはゆとろぎへ

☎042(570)0707



白井一紀(うすい・かずのり)氏 1939年生まれ。新工芸家連盟関東地区会会員、全陶展会員。新工芸展、全陶展、セラミックアート・フジエンナーレ、長三賞陶芸展、朝日陶芸展、日展などで入選、受賞多数。羽村市小作台在住。

第35回全陶展 文部科学大臣奨励賞
第39回日展(工芸美術部門) 入選

陶の世界 白井一紀

2月29日~3月13日/10:00~17:00(最終日は16:00閉場)
生涯学習センターゆとろぎ展示室/入場無料

陶芸を経験したことのあ
る人は、思い通りにならない
悔しさを少なからず味わっ
たことがあるはずだ。しか
し、白井一紀氏は陶芸の面
白さを「未知なもの、技術
的な可能性が残されている。
独創性、ユニークさ、斬新
さを自分で開発できる可能
性がある」と言い、「素人が
既成概念を打ち破ることが
起こり得る。冒険ができる。
邪道と言われそうなこと
も可能で、だからこそ奥が
深い」と語る。

白井氏が陶芸を始めたの
は第一次オイルショックの
頃で、「家で粗大ゴミになっ
ていたから」と苦笑する。陶
芸歴は35年を越える。40代、
50代は本業の会社経営が忙
しく、本腰を入れたのは60歳
を迎えてから。「人に見ても
らうものをつくらう」と思
うようになった。2000
年に陶芸界の中心的公募展
の「全陶展」に入選した。
応募のきっかけは、陶芸仲
間の「出せよ!」の一言だっ
た。それ以前、「東京都勤労
者美術展」にぼつりぼつり
と応募し、東京都知事賞を
受賞した経験があった。「俺
もなんとかなるかな」と思っ
た。「作品が並ぶと結構目立
つ。気分がいいし、嬉しい」
それが続ける要因になった。

陶芸は公民館の講座で手
ほどきを受けた。以後は独学
である。先生も指導者もい
ない。だから人の技法に染
まっていない。本に書かれ
ている事をその通りにやっ
ても、できることはほとん
どなかった。自分で勝手に
想像しながら作品をつくる。
「えっ!」と言う発見ばかり
だった。だが、新しいこと
が突然にできたわけではない。
その表現法が目的に適っ
ているかどうか、2年も3
年も前から、ものによつて
は4年も前から試行を重ね
た。それまでの表現方法を
続けながら、新しい表現を
同時並行的に追求する。「試
し焼きで物理的、化学的に
粘土や釉薬の特性を試すの。
科学の実験みたいなものだ
ね。理系の自分には体質的
に合っているのかも」と言
う。

「陶芸は変形と割れとの闘
い」だと言う。白井氏の作
品は50、60センチくらいの
大きさである。仲間や助手
がいるわけではない。一人
で作らなければならぬ。一
ら、大ききの割には軽い物
をつくらなければならぬ。
軽くするためには制約が
ついてまわる。割れないよ
うにするためにはどうすべ
よいかを考えなければなら
ない。

「焼く前に割れていなければ
95%は成功。焼いたとき
に変形、焼きムラが出来る
のは5%くらい」だと言う。
肉厚は普通12、3ミリだが、
白井氏の作品は7ミリから
8ミリ程度である。もつと
も難しいのは均一に乾燥さ
せることである。薄く作る
のは均一に乾燥されるため
の手段でもあるが、一方で、
薄くすると造形の途中で形
が崩れやすい。「そのバラ
スをどうとるかノウハウ、
企業秘密」と笑う。

さらに、焼き上がると
15%程度は縮む。60センチ
のものならば、原形は70セ
ンチを越える。大きな作品
の制作は、作家の肉体的な
条件に制限される。だから
作家の身長と作品の大きさ
は往々にして比例すると言
われる。「背の高い人は背の
高い作品を作りやすいじゃ
ないですか。手が長くて上
背がないと奥まで手が届か
ないから」と言う。

文部科学大臣奨励賞を受
賞した『花想ひ』は「練り
込み」という複雑な技法を用
いた作品である。だが、平成
19年の「日展」にはこれまで
の技法、作風とは異なる作品
を出展し、二回目入選を果
たした。「10年後にまた元の
作風に戻ったとしても、この
10年の積み重ねは役に立つ
はず。また新しい発見、喜びが
あるはず。そうありがたい」と
言う。また、「やりたいもの、
いままでやっていないジャ
ンルがいくつかある。いつか
チャレンジしてみたい。どこ
まで行っても完成がない。陶
芸の世界には巨人と言われる
先達がいる。そういう人の爪
の垢は飲みようがないから、
先達を心の師として目標とし
て挑戦したい。先達の作品か
ら受けた刺激を自分なりに表
現する方法が見つけれたら
よいかなと。いくらか老化が
遅れるでしょう」と目を輝か
せた。



第35回全陶展 文部科学大臣奨励賞受賞 『花想ひ』

ゆとろぎ
アカデミア

ゆとろぎ文化講演会を前に 金田一秀穂先生を訪ねた



撮影/村山利夫

日本語ブームである。日本語、漢字の検定が大流行り。クイズ番組やゲームも人気を集めている。日本語の常識と違っていたことが、案外に違っていたりする。そんなとき、日本語学者の金田一秀穂先生が「なるほど」と感心する解説をしてくれる。

その金田一秀穂先生を研究室に訪ねた。現代の日本語事情や世代間の言葉の摩擦、「若者語」、メールでの言葉の使い方などについて聞いてみた。

昨今の日本語事情について金田一「敬語が苦手だから」とか「失礼があつてはいけない」とか、考え過ぎ

的に決めたがる風潮も影響していますね。「楽しみます」か、「プレッシャーに負けそうです」かのどちらかなんですね。最近、わりと厳しくないですか。もっと曖昧でいいと思いませんか。「楽しんでみたいけど、難しいです。でも楽しみたいと思います」とかね。日本語は本来、もっと曖昧な表現を好むんです。

決まりきった言い方というのは、安心かもしれませんが、かえって生気が失われてしまうものです。本当に言いたいことが言えなくなってしまう。ですから、私たちが普段に使う日本語は、どれも美しく、どれも正しいし、自分の気持ちをいちばん表現できる言葉が「いい言葉」だと言える。

「日本語が乱れている」とよく言われますが。金田一「乱れている」ではなく、「変化している」のです。変化するのは仕方ないことです。「乱れている」と言いたい気持ちはわからなくもない。人は言葉に対しては、保守的にならざるを得ないから。自分が若いときに身につけた言葉が現在の自分を形作っている、いわばアイデンティティになつていくわけですね。それを汚されるのはつらいです。でも、現実には変化せざるを得ないし、自分たちも変化してきたのです。だから、変化を「よくないこと」と、とらえるのではなく、変化を停めるプレッ

キ役になればいいのだと思います。最近、何を聞かれても「微妙(びみょう)」の一言ですませる若者が多いですね。金田一 若者には若者特有の表現があり、おじさんにはおじさん特有の表現があります。それは、自分たちの連帯感、仲間意識を高めたい、でも、教えたくない人からはちよつと離れた、そういう働きがあります。若者は、新しい時代に生まれて、出来合いの言葉で自分の気持ちを表現できない、と思うわけですね。自分の気持ちを表現できる言葉が「いい言葉」であつて、違う言葉をもつてきて自分の気持ちを表現できると思えば、それを使う。相手も理解しやすい。なんの文句も言えません(笑)。

僕らの世代にも、「総括」とか「ナンセンス」とか、それを使つていけば分かり合える言葉がありますよね。だから、若者がおじさんに若者語を使つてはいけなし、おじさんがおじさん語を若者に使つて、理解されないからと怒つても仕方がない(笑)。表現が「上手」、「下手」ということが関係しますか? 金田一 言葉で自分の考えをすべて表すことができると思わない方がいいですね。せいぜい60%くらいを表せばいいのではないですか。ただ、言葉のプロ、新聞記者や教師、政治家はきち

んとした言葉を使うべきですね。僕も含めてね。「女性は子供を生む機械」発言で批判された政治家が「私は国語力がないので」と弁明していたでしょ。でも、政治家は言葉を商売にするプロではないですか、それが「国語力がない」と言い訳するのは、いただけません。メールでは、よけいに敬語の使い方が難しいです。金田一 身につけていない敬語を使つてしまうことがありますね。電子メールのフォーム(形式)がまだ決まっていなくて難しいところですね。もう少ししたら、「これが正しいメールの作

法」みたいなものが決まってくるでしょうが、まだ揺れ動いている状態ですね。そこがまた面白いのですが。形は自然にできてくると思います。流行によって変わる可能性もありますね。▼お父上の春彦氏は、戦時中、羽村に疎開していたそうで、学生の中に羽村っ子がいるとも。不思議なご縁である。▼飾りのない語り口はテレビで拝見する金田一先生そのもの。ことばに対する愛着と人への優しい眼差しを感じた。3月の講演会が楽しみである。(取材/日下田まや)

ゆとろぎ文化講演会

講演

杏林大学外国語学部教授・日本語学者

金田一秀穂 先生

日時■3月20日(祝) 開演 14:00 (開場 13:30)

会場■生涯学習センターゆとろぎ小ホール (入場無料)

※未就学児の入場はできません。一時保育(有料・要予約)がありますので、ご希望の方はゆとろぎへお申し込みください。

※駐車場に限りがあります。ご来場の際は市内循環バス「はむらん」をご利用ください。



明けまして おめでとうございます

お蔭さまでゆとろぎは開館3年目を迎えました。これも一重に市民のみなさまのご理解ご支援、関係各位のご指導ご協力の賜ものと心よりお礼を申し上げます。3年を一つの節目ととらえ、次の3年へ向けて、心を新たに組み組んでまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

来て、観て、楽しんで。そして、参加して！ 2008 年度協働事業企画案の概要まとまる



撮影 / Gyula Fodor

ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団

ゆとろぎ市民の会では、昨年の夏から、08年度(08年4月以降実施)の事業企画を検討してきました。これまでの実績を参考に、市民のみなさんのご要望、興味関心になお一層お応えべく、事業案(左頁参照)をまとめました。ここで主なものを紹介いたします。なお、事業案は教育委員会の承認を経て実施されます。

■芸術鑑賞事業

音楽の都 ウィーンからピアノ三重奏が、劇団四季も、パイプヤ鈴木もやって来る

芸術鑑賞事業は、幼児から高齢の方まで楽しんでいただけるように、コンサート、演劇、寄席、ミュージカルなど幅広いジャンルの公演事業を企画しています。

10月開催予定の『ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団』は、ソリストとして欧米中心に目覚ましい活躍を行っているピアノニスト、マリノ・フォルメンテとウィーン・フィルの前コンサートマスターで名ヴァイオリニストのダニエル・ゲーデ、そして、ウィーン・フィルの現メンバーで「チェロの貴公子」と呼ばれるラファエル・フリーダの3人によって、07年に結成された新鋭のピアノ三重奏団です。彼らが紡ぎ出す名曲の数々は日本の音楽愛好家の心を捉えてやまないことでしょう。

この企画は、財団法人「青梅佐藤財団」(青梅市)のご好意により、ゆとろぎ大ホールでの開催が実現しました。

一昨年のチャイコフスキー弦楽四重奏団に続いて、今年も音楽の都、ウィーンのパイプヤ鈴木もゆとろぎで聴けるなんと、クラシック音楽ファンには垂涎の、嬉しい企画です。この他、中高年男性に元気を与えてくれる「パイプヤ鈴木とおやじダンサーズ」、「青少年&子どもフェスティバル」との協働で劇団四季のミュージカル、尺八とジャズのコラボ「ユニットささかま&藤原道山」なども開催の予定です。

■展示事業

水墨画、油絵、織り、多彩なジャンルを バラエティ豊かに

「アートを気軽に市民のみなさんへ」をキャッチフレーズに、ゆとろぎ全体を美術館とみ立てて、展示室を中心に多彩なジャンルの美術展を開催します。

4月の絵本原画展は、羽村図書館との協働事業です。繊細な色使いの垂石真子さんのすてきな絵本原画の世界を家族でお楽しみください。相前後して、ゆとろぎでは初めての「水墨画」展を開催予定です。上海出身で青梅市在住の水墨画作家、白浪(はくろう)先生とその弟子で羽村市在住の荻島初美さんの二人展です。繊細で、ダイナミックな東洋美術の秀作をご堪能ください。

5月には、羽村市在住の画家、岸本和子さんの「油絵展」を開催します。岸本さんは女性モデルにした作品を数多く手がけ、これまでに大調和

展文部大臣奨励賞、二元展桂冠賞を受賞するなど、高い評価を受けています。清らかな女性画をぜひご覧ください。あなたの心を癒してくれるでしょう。

■学習・文化事業

趣味、創作から文学講座、地域の課題講座まで

『生活の中のIT活用講座』はインターネットをもう一歩も二歩も活用して、便利で豊かな生活に活かそう、という講座です。

『写真講座』は今大人気のデジタルカメラとちよっとレトロなフィルムカメラの2講座を企画中です。どちらの講座を受講するかはお好み次第。両方受講も可能です。デ

ジカメ、フィルムカメラの基礎から撮影テクニックまで、じっくりお教えします。『自分史』講座は、パソコンを使って、気軽に文章を書く実践的なテクニックと、自分史を書く上でのちょっとしたコツ、意外な自分史のスタイルを学びます。パソコンのない方でも受講可能です。この他、災害対策、個人情報保護、環境エネルギー問題などの社会的課題の学習講座や芸術創作講座(油絵、陶芸、押し花など)、文学文芸講座なども企画しています。



第43回二元展桂冠賞受賞「刻」岸本和子

08年度事業案は変更あるいは中止になる場合があります。詳細は今後の月刊ゆとろぎ、広報はむらなどをご参照ください。また、事業案に対する市民のみなさんご意見ご要望をお聞かせください。書式は問いませんので、ゆとろぎ館内にある「提案箱」をご利用ください。

2008 年度ゆとろぎ協働事業企画案

●：通年・シリーズ事業／◎：単独事業／◆：共同事業／○：検討中

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
芸術鑑賞	大ホール		◎ゆとろぎ寄席(特別)					◎ウィーン・フーゴ・ヴォルフ三重奏団(青梅佐藤財団助成)					◎文楽	
	小ホール				◎パバイヤ鈴木&おやじダンサーズ				◎ユニットささかま&藤原道山<邦楽>				◆劇団四季<青少年&子どもフェスティバル>	
展示	ギャラリー		◎水墨画展	◎岸本和子油絵展				◎織 - KASURI 展		◎多摩切り絵展				
			◆垂石真子絵本原画展		●アート in はむら展 VIII									
						●西多摩百景写真展 III							●中根喜七郎氏寄贈作品展	
									○日本画グループ展とワークショップ					○楽しいアート展
														●ゆとろぎ美術館(3期)
情報発信														
													●月刊ゆとろぎ<毎月15日発行>	
													●季刊ゆとろぎ<5月、8月、11月、2月の各1日発行>	
													●ホームページ<毎月更新>	
学習・文化	暮らし・生活													
	芸術・趣味													
	学習・教養													
地域・社会														
3周年記念事業														

※左表は07年12月現在の企画案です。事業は変更あるいは中止になる場合があります。申し込み・問い合わせは生涯学習センターゆとろぎ042(570)0707へ

ゆとろぎ ビデオ シアター

グスタフ・ホルストの名曲「組曲『惑星』作品32」の調べにのせて、NASA(米国航空宇宙局)の最新画像とコンピュータ・グラフィックで遙かな惑星探査のバーチャルツアーへご招待!

名曲とともに 星との語り

■2月29日(金) 上映開始 19:00
 ■生涯学習センターゆとろぎ小ホール
 ■入場無料

制作/カジマジョン(約90分)
 音楽/新日本フィルハーモニー交響楽団
 指揮・解説/大友直人

2月の
ゆとろぎ
アカデミア

ゆとろぎ
クラブ

「ゆとろぎクラブ」は市民のみなさんと生涯学習センターゆとろぎ及びゆとろぎ協働事業運営市民の会を結ぶ交流の場です。ゆとろぎからの情報だけでなく、市民のみなさんからの呼びかけ、問いかけ、事業に対するご批判、ご提案も大歓迎です。「市民一人ひとりの生涯学習を支援する」ために市民のみなさんからの情報をお待ちしています。

仲間といっしょに描くから楽しい!



(上)各自が自由気ままにイーゼルに向き合い、時折、冗談も飛び出すほどに和気あいあいな例会。(左)栄口先生の丁寧な助言が元気のもと。ますますやる気を掻き立てる。



「アートフレンド」は原則として、毎月第1、第3水曜日の午後1時から4時まで、ゆとろぎ3階の創作室で絵筆を奮っています。会員は20代から70代まで幅広く、産休中の女性も含めて15名が在籍。講座当時から栄口健三先生に指導を

受けながら、既に10点ほどの作品を描いています。訪問した日は、ちょうど新しい題材を描き始めたところ。鉢植えの深紅のシクラメンを囲み、各自が思い思いの場所にイーゼルとキャンバスを広げて、デッサンに取り組んでいました。ほとんどの会員が油絵はまったく初めてだったそうで、「まだまだ、見たように色が描けない」ところが難しくもあり、面白いところだそうです。会長の近藤明さんは「みんなと顔を合わせて描くことが励みになる」と言います。会員それぞれに忙しく、自宅で描く余裕があまりないので、月2回の例会がなによりも楽しみなのだそうです。

結成して1年少々、まだ

06年の春、ゆとろぎが主催する趣味の講座がスタート。陶芸、押し花アート、油絵、日本画、水彩画などに約200名が受講。07年3月には、講座期間中に制作した作品を一堂に集めて「講座作品展」を開催、講座の区切りとしました。以後、それぞれに自主グループを結成して、創作活動を楽しんでいます。今回、油絵グループの「アートフレンド」の活躍の様子を紹介します。

グループ独自の作品展を開催できるまでには至っていないというのですが、栄口先生の懇切丁寧な指導で腕前は日進月歩の上達。志は大きく、「目標は日展」が掛け声で出るほどに、静かな中にも熱気にあふれた「アートフレンド」のみなさんです。「アートフレンド」に心のある方は、副会長の阿部さん(☎042(554)2423)へお問い合わせください。

ゆとろぎの講座から誕生した 油絵グループ「アートフレンド」

ステージ裏の記念碑

大ホールのステージ裏、楽屋通路のコンクリート壁に、これまで大ホールに出演した演奏家、アーティストのサインがあることはあまり知られていません。加山雄三さん、中村あゆみさん、東京コスモポリタンプラス、ストリングスファイアの水島一江さんなどが出演記念に残してくれたものです。これから、どんなアーティストがサインを残してくれるか楽しみます。見学を希望される方は、ゆとろぎの受付に一言声をかけください。



国分寺市からゆとろぎを訪問

恋ヶ窪公民館利用者連絡会のみなさん

去る12月5日、国分寺市恋ヶ窪公民館から菊池澁館長並びに利用者連絡会の佐野享代表ほか5名の方々がゆとろぎに来館。恋ヶ窪公民館の移転政策に向けての事例研究を目的に、ゆとろぎの施設の見学とゆとろぎにおける市民協働の実践について研修されました。ゆとろぎの施設のすばらしさに「別世界です」との声とともに、「市民に広く利用されるかどうか、関心をもって見ています」との声もありました。ゆとろぎからは市民の会の関沢和代会長、事務局が参加。市民の会の心意気も感じていただいたようです。短い時間でしたが、有意義な交流をはかることができました。

季刊ゆとろぎ ● 2008年新春号
2008年1月1日発行(通巻8号)
発行 ■ 羽村市教育委員会
企画 ■ 羽村市生涯学習センターゆとろぎ
ゆとろぎ協働事業運営市民の会
〒205-0003
羽村市緑ヶ丘一丁目一五
☎042(570)0707
FAX 042(570)6422
http://www.city.hamura.tokyo.jp
印刷 ■ (株) 東光社
〒114-0013
東京都北区東田端一丁目二二
☎03(3810)9331
編集 ■ 江久保千英・関沢和代・関根和美・日下田まや・平田栄一・船橋瑛・古澤義隆・村山利夫・山本豊・横田轟・羽村市生涯学習センターゆとろぎ
写真 ■ 平田栄一・村山利夫
無断転載をお断りします。
Copyright © 2008 by YUTOROGI
All rights reserved.

【編集室から】▼ゆとろぎ開館初年度の利用実績が昨年報告されました。初年度1年間の合計利用者数は29万人。羽村市の人口の約5倍強、月平均2万人以上の利用者ということになります。▼利用件数(イベント数)を見てみると、ホールが1824件、講座室などが5792件。単純計算で、ホールは大・小含めて1日5件のイベントが行われたこととなります。市民のみなさんのゆとろぎに対する期待の大きさを感じます▼今年、3年目を迎えるゆとろぎ市民の会は、あらためて初心を振り返り、羽村の市民文化とはなにか、市民にとっての生涯学習とはなにか、を考えたと思います▼そして、「新春鼎談」にもあるとおり、今年市民のみなさんと「参加する喜び」を分かち合える年にしたいと願っています。あなたの知識や経験、興味や関心をゆとろぎで発揮しませんか。